

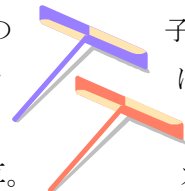
終戦月に思う どちらが幸せ？ 貧しかった我々の子供時代と  
物に満たされた今の子供と？

開戦の年に生まれた私の名前は「武」。“強くあれ”との親の願いがあったようです。4歳のときに終戦。最も古い幼児時代の記憶は、山のふもとの幼稚園で、ブランコから落ちて鼻血を出したことです。記憶に残る終戦直後はすべてが貧しい時代でした。食糧も物資も欠乏。小学校に上がると、教科書さえも兄の“おさがり”。カバンは布製の袋を背負う形にしたもの。履物は親父が藁で編んだ草履か下駄でした。つぎのあたたか服で学校に通う子も何人もいました。

木造校舎の教室の一部の窓は、ガラスが壊れて薄い板で覆われたまま。二人用の机の上は、いたずら書きや傷跡ででこぼこ。お昼は麦入りの弁当。ごはんの代わりにサツマイモを持ってくる子、なかには、家から持ってくるものもなく、昼食を我慢している子もいました。実家(信州・伊那)には、叔父一家が東京から疎開していました。母が土蔵から出してきたお餅を、乞食にひったくられようとしたのを、たまたま目にした光景が今も鮮明に浮かんできます。都会も田舎も生きていくのに精いっぱいの日々だったのです。



それでも、自分たちの  
ちより不幸だったと  
ん。学校の帰りには、  
ウを追いかけての道草。



子供時代が、今の子供た  
は必ずしも思えませ  
田んぼ道でドジョ  
ガキ大将がいて喧嘩も



あった。でも、陰湿ないじめや仲間を殺傷するようなことはありえなかった。少ない遊具をみんなで使い、自分の遊び道具は自分で創り出した。それぞれが自慢の水鉄砲、竹とんぼ、メンコ等々と・・・。

体育の時間はよく野球で遊びました。生徒30人に対しおんぼろグローブが8個ほど。それを交替で使い、グローブがいきわたらない人は素手でボールに飛びついていました。昼休みや放課後は、校庭で陣地を争い体をぶつけあう肉弾ゲームとかドッチボール。薄暗くなるまで遊びほうけた毎日でした。

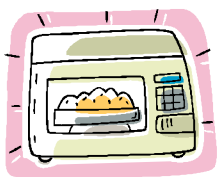
今、あふれるようなおもちゃの洪水。しかも高価でその多くが毎年スタイルを変えていく。商業主義の反映です。野球少年はプロ選手並みのカッコいいユニフォームを着て、グローブもバットも各自が新品を持っています。家にはゲーム機、小学生にして携帯電話まで持っています。誘拐に備えた安全対策だといいます。

遊びたくても学校管理上、遅くまで残れない。塾にも行かなくてはいけない。夜10時ころ、塾から帰ってくる小中学生に会うと、“ああ、大変な時代だなぁ！”とってしまうのです。

親の役目は衣食住の世話をするだけ。キチンとしつけ、子供を叱れる親は少なくなっているようです。我慢や辛抱のできない子供、人の痛みがわからない子供・・・。子供たちはテレビで覚えたインスタント食品を最高のご馳走と思っている。料



理もそこそこに、冷凍食品をレンジに放り込み、それで時間を節約したと思っている主婦……。どこかが狂っているような気がします。



貧しかった終戦直後の自分たちの時代がよく思われるのは、単なるノルスタジアでしょうか。物の豊かさ、文明の進歩は、必ずしも人間の幸せにつながってはいません。もっと言えば、奈良・平安時代と現代の人々とどちらが幸せか、と問うても、単純に結論が出るものでもないでしょう。「人間の幸福とは何か」と哲学的で根源的な問いかけが必要かもしれません。

……といったところで、論理の飛躍した、まさに“気ままの発信”ですが、読者の皆さまのお考えやご意見を伺えれば幸甚です。